

# メリメの暴力論

## —『マテオ・ファルコーネ』、エトス、神話

奥田 宏子

はじめに

プロスペル・メリメ（一八〇三—一八七〇）の『マテオ・ファルコーネ』は、若年二六歳の作品で、「実質上の処女作」<sup>(1)</sup>とされる。一八二九年の『パリ評論』に掲載されて評判となり、小説家としての名声を確立した。およそ十年後に地中海の同じコルシカ島に取材する『コロンバ』を執筆、この二つはメリメの「コルシカもの」<sup>(2)</sup>として知られている。作者が島を初めて訪問したのは一八三九年、当作品発表後十年経ってからであった。<sup>(3)</sup>『マテオ・ファルコーネ』は島をまだ見ていない時点で構想され執筆されたのである。<sup>(4)</sup>

二つの「コルシカもの」には島民の家族関係をプロットの主軸に立てるといふ共通点がある（『マテオ・ファルコーネ』では親子、『コロンバ』では兄妹）。だが二作品はトーンにおいて、またジャンルのにも大きく異なる。後発の『コロンバ』が軽妙な喜劇的トーンを採用して「結婚」で終結するのに対し、『マテオ・ファル

コーネ』には恐怖のトーンがあり、結末は「死」だ。

一人のコルシカ男が起こした銃殺事件、これが『マテオ・ファルコーネ』の主題である。殺したのは父、殺されたのは幼い息子だった。あまりに悲痛であるがゆえに認めたくないものだが、古今東西、「子殺し」は繰り返されてきた。古代ギリシャではエウリピデスが母親メディアによる壮絶な「子殺し」をドラマ化し、のちにルーベンスやゴヤはローマ神話の「わが子を喰らうサトゥルヌス」を絵画として描いた。現実生活上の「子殺し」は、今も新聞紙上に事欠かない。

この重いテーマをメリメはどのように語ったのか。義務としても、また一般人の人情としても、わが子は保護と愛情の対象とされるだけに、そのわが子に致死的に暴力を加える話を語るとは、暴力の究極の姿を見ようとする、すなわちその深い闇に切り込んでいくということだ。本稿は「子殺し」物語『マテオ・ファルコーネ』に作者メリメの暴力観がどのように映し出されているかを考察する試みである。

## 幸いなる子

当作品の息子フォルチュナト（<sup>5</sup>「幸いなる子」）は、なぜ父親に殺されなければならなかったのか。ひとりで留守番をしていた少年は、逃げ込んできた「お尋ね者」を自宅の庭の乾草の中に隠して一旦匿ったものの、追跡してきた憲兵に隠れ場所を教えてしまったのだ。両親がやがて帰宅、事実を知った父は近くの窪地に子供を連れて行って銃殺した。

コルシカにはマキと呼ばれる特有の密生林があり、武器を身につけてここに身を隠しさえすれば、罪を犯した者も生き延びることができるという。マキについてのつぎのような描写で『マテオ・ファルコーネ』は始まっている。

ポルト＝ヴェッキヨの町を出はずれて、西北をさして島の奥の方へ進むと、目に見えて急に土地が高くなつて来る。それから大きな岩の塊がいくつも途中をふさいでいたり、時々は窪地になつて間の切れていく曲がりくねつた小径をものの三時間も歩くと、豁然と眼界が開け、広い「マキ雑木山」のふちに達する。マキはコルシカの羊飼いたちの故郷である（三〇七）。

息子フォルチュナトが両親の留守中に匿つた男は、このマキに身を隠す「お尋ね者」の一人だつた。<sup>(6)</sup>もし諸君が人殺しか何かやつたなら、ポルト＝ヴェッキヨのマキへ逃げ込むがよろしい。上等の小銃が一挺と火薬と弾丸さえあれば安心して暮らしていける」（三〇七）と作者は解説している。マキでは羊飼いたちが「お尋ね者」に「牛乳とチーズと栗を持ってきてくれる。：司法権も、また殺された男の血続きの者も恐れる必要はない。ただ弾丸を仕入れに町において行く時だけ用心すればよいのである」（三〇八）。

マキは「羊飼いたちの故郷」であり、コルシカ原生の密生林、島民には聖域に近い特別な思い入れがある。司法権が及ばないというのであれば、無法地帯の匂いもする。ここに隠れる者には住民の誰彼が食糧を運んできてくれるという。直属の血縁関係を大きく超える仲間意識、相互扶助的な関係が島民とそこに隠れる者との

間にあるというのだ。

父親マテオが守備しようとする島民間の結束はマキという場所に集約されるものであり、これは先祖からの土地と自然を媒体とする仲間意識として、近代以降の契約社会の対極にあるものだ。

自然と人間との原初の結びつきを象徴するマキに潜む人間に必要なものといえば、食糧（これは村人が差し入れてくれる）と武器だった。作品の「お尋ね者」は、弾薬を補充しようとマキから町に出て、当局の選抜兵に捕まってしまった。選抜兵に追跡され脚に弾を受け、救いを求めてようやくたどり着いたのがマテオの家だった。

島の結末に殉じようとする義理がたい男の息子が、島民なら当然に保護すべき「お尋ね者」の隠れ場所を当局者に教え、彼の逮捕に協力した。父親は息子のこの行為を島の道徳の否定、ひいてはコルシカの否定とまでとった。

イタリア寄りの地中海に浮かぶこの島は、歴史上、早くはフェニキア人、ギリシャ人、カルタゴ人の植民地となり、ローマ帝国による支配を経て、中世以降はピサ、トスカーナの支配下に入り、つぎにジェノヴァ共和国の圧政を痛いほど味わった。<sup>(7)</sup> 島への侵略者は当然ながら海から入って来たから、中央の山岳地帯に身を隠して島民はマキを拠点に対抗した。人が踏み込めない、人を踏みこませない島の密生雑木林マキへの思い入れは、こうした背景と無関係ではない。マキに隠れ住む者への共感もまた、戦乱に次ぐ戦乱をくぐって島を守ろうとした島民の抵抗の歴史を背景に生まれてきたものであろう。

父マテオが当然と考えた、「お尋ね者」の保護は、単なるセンチメンタルな同情心ではなく、長年かけて歴

史的な背景から島に生まれたエトスの一部と考えていいだろう。マテオの息子はこれを侵した。したがってここにいるのは、父としての私情と島民としての義務、個人と集団、といった二項対立のなかで後者を選ぶ一人の人間である。一般的に言って、「忠ならんと欲すれば孝ならず。孝ならんと欲すれば忠ならず」といった馴染みの主題の主人公は、いずれ劣らず大切な二つの価値に引き裂かれて葛藤する。読者はときに涙しながら主人公の苦悩を共に辿る。

息子に銃を向ける父の心境を、それでは『マテオ・ファルコーネ』は、どのように語っていくのか。肉親愛と共同体への忠誠心の板挟みになったマテオの苦悩はいかばかりであったことか…。

ところが意外なことに、作者メリメは常道を選ばず、まったく別の手法で「子殺し」物語を展開させた。不思議なことこの作品の父親は、迷わない。即断する。作品の全体の意味に関わるこの手法は次章で論じることにし、この章では殺された息子に焦点を当てていく。

結論から述べると、息子フォルチュナトの扱いは、父マテオといかにも対称的である。実際に「子殺し」というアクションを起こすのは父親のほうで、息子は殺される側であるから、いわば受け身のはずなのだが、その受け身のはずの息子の「迷い」が、丹念に描き込まれている。なぜメリメはこのような常道に反する手法をとったのだろうか。

息子についての事実確認から始めることとし、この子が十歳そこそこだという事実をまず考えたい。集団への義務、島民の結末、これらの社会性や倫理観をどこまでこの子に期待してよいのか、という問題提起が年齢設定から生じてくるのだ。一切迷いを見せない父親と対照的に、息子のほうは迷いに迷うのだが、何について

この子は迷うのか。幼い子にどんな葛藤が可能だというのか。

十歳とは、ものごとの弁別能力に関して、クリティカルな年齢だ。メリメほどの周到な作家なら、無頓着に息子の年齢を定めたりはしなかったはずだ。作者は十歳の子供の理解能力に限界があることを承知のうえで、この子の年齢をどのように設定したと考えて間違いない。結論を先取りすると、弁別があつたということであれば、この作品は（殺害が過剰な処罰である点はさておいて）父親による「裏切り者」（息子）の懲罰物語として、ひとまず成立し得る。

だが弁別がなかったとなると、話は別だ。「子殺し」は処罰ではなくなり、作品が因果応報の道理から外れていく。メリメは当作品の子供を微妙な年齢に定めることによって、この子が弁別可能な――たとえば十七・八歳ぐらいの――年齢に達している場合には起こり得ない、別種の問題提起をしたと考えられる<sup>(8)</sup>。

フォルチュナトの行動をテキストで検証してみよう。マキから来た男を隠した乾草の山を警察に教えるべきか否か……これが少年の究極の迷いどころだが、その前段階として最初の葛藤が描かれる。一人で留守番をしているとき、血を流しながらマキの男が逃げ込んできた場面だ。両親は家畜の見回りに出掛けて留守だ。目の前に突如として傷を負った男が駆けこんできたのだから、この子が驚いて当然だ。男は追跡されているから匿ってくれと頼み込む。

懇願する男に対する子供の対応は、いわば「どうしたらいいか、僕、分からないや」といったもので、「父の承認」が得られるかどうか分からないから……と言っている。こうした人間が逃げ込んで来た場合にコルシカ人ならどうするべきか、共同体の約束事があるにしても、この子はまったくそれを知らない。「父の承認」が

なくては決められないというのだから、この子は父親からまだ分離できておらず、人格としてまだ独立していない。

思うに、父マテオが求める種類の忠誠心は、それを義務というなら、集団への帰属を自覚できる年齢になった「一人前」の構成員に生じてくる義務である。その意味で、父からの分離をあきらかに果たしていないこの男児は、まだ完全には集団の仲間入りを果たしていないと考えるべきだろう。逃げ込んできた男の台詞、お父さんは「いいことをしたと言うに決まっている」（三〇九）も、父の承認に言及することで、男児がまだ「一人前」でないことを傍証している。

目前の状況にどう対処するべきか、一人で判断できないこの男児は、父親が帰ってくるまで待つてくれるように「お尋ね者」に頼んだ。だが追手が迫ってくるのを知っている切羽詰まった「お尋ね者」は、少年を銃や剣で脅し、それで効果がないと分かると、今度は五フラン銀貨を持ち出した。

「お尋ね者」とフォルチュナトの間の、このあたりのやりとりが詳細に描かれている。息子の責任能力の有無がこの作品の意味を大きく左右するからだ。「お尋ね者」が革袋から出した五フラン銀貨。息子はその見えてにやりとして、すぐに乾草の山を掘って穴を作り、この男を隠した。

銀貨を目の前にして、フォルチュナトが態度を変えたのは確かだ。銀貨が彼に何らかの威力を発揮したことは否定できない。だが同じこの場面の彼の言動は、この子が島民として大人と同等の社会的義務を担うには、いかに「半人前」であるかも同時に明らかにしていく。

フォルチュナトが銀貨を受け取った一件は、十年後に『コロンバ』の青年主人公オルソの口から出ることに

なる言葉と対比すると理解しやすい。青年は言うのだ。コルシカ人にお金の話をするな……と。島氏は金銭に換算できない精神的価値を重んじる……というわけである。当作品でフォルチュナトがお金で動いたのは確かであり、まさにオルソ青年が端的に示したコルシカの倫理に反している。

とはいえ問題は、この子供が果たして仲間間の義理人情といった抽象的合意の意味を真に理解していたのかどうかにある。目の前のきらきら輝く銀貨に釣られて動いたほんの子供の行為なのか、それとも金銭の価値を倫理の上に置いて意志的にコルシカの価値に違反したのか。<sup>(9)</sup>

銀貨を手にしたフォルチュナトは「お尋ね者」を匿った。すると待っていたかのように「お尋ね者」を検挙するために六人の捜査隊が家の戸口に立った。男がここに匿われていることを確信している彼らは、男の居場所を子供に白状させようと躍起になる。フォルチュナトの第二の葛藤がこうして始まる。

この子は「お尋ね者」の隠れ場所を告げるのか。作者はここでも子供の心の動きを詳細に描いている。彼は、結局、「お尋ね者」の隠れ場所を捜査員に教えてしまうのだが、なぜ教えてしまったのか。これによって殺されることになるのに。

本文を見てみよう。フォルチュナトに男の居場所を吐かせようと捜査隊の隊長はいろいろな手口で迫ってくる。子供は当初、質問をうまくかわして居場所を教えない。掌には銀貨が握りしめられている。抽象的なコルシカの義務を分かっているのか、いないのか。メリメは銀貨の存在は彼の手中に重い……とだけ書いている。

ここで展開される捜査隊長と子供の問答だが、これがまったく要領を得ない。当面の問題について子供の理解能力に限界があることは確実だ。二人の間のちぐはぐな問答は、この子が父親のような一貫した価値観のも

とでコルシカ的理想に立つて、「お尋ね者」をかばっているわけではないことを露呈する。

## 孤立する父

居場所を教えないフォルチュナトに捜査隊長は、正直に白状しないと「首斬り台にたたき上げるぞ」(三一)と脅しにかかった。子供はあっけらかんとして笑いだした。逃げて来た男を匿ったのも義理人情を踏まえた上のことではなさそうだったように、いま男の居場所を教えないのも何らかの信念があつてのことではなさそうだ。隊長とのやりとりからフォルチュナトの幼さ、未熟さが現れ出てくる。何としても子供の口を開かせるため、捜査隊長は次の手段に出た。今度は銀時計作戦だ。

軍曹(捜査隊長)は、かくしのなかから確かに十フランはする銀時計を取り出した。フォルチュナトの目が時計を見て急に輝いたのを見て取ると、彼は鋼鐵の鎖の端に時計をぶら下げて見せながら、言った。「どうだい！ お前はこんな時計を首へ掛けたくないか？ 孔雀みたいに威張って、ポルトゥヴェツキヨの町を散歩するんだ。みんなが「今何時でしょう？」ときく。「私の時計をごらん」とお前がこう言うんだ」。

：

こう言いながら、相変わず曹長は時計を子供の青白い頬に近づけ、ほとんど触れんばかりになった。

子供は時計ほしさといったんかくまったものに対する遠慮との相搏つ心中の闘争を、明らかに面<sup>おもて</sup>に現した。はだけた胸は激しく波打ち、今にも息が詰まりそう。時計は左右に揺れた。くるくる回った。時々子供の鼻の先にぶつかった。ついに子供の右手は少しづつ時計のほうへせり上がって行つた。指の先が時計に触れた(三二三、括弧内は筆者の加筆)。

「時計の文字盤は空色である……側は磨き立てである……太陽に輝いて、火のように燃えていた……誘惑はあまりに強かった」(三二三—四)。フォルチュナトは、男の隠れ場所である乾草の山を指差した。彼の居場所をついに教えたのだ。男はすぐに乾草の中から引きずり出され縛りあげられた。引きずり出された血まみれの男は、「それでもマテオの……」と子供に向かって「怒りよりも軽蔑の調子を込めて吐き出すように叫んだ」(三二四)。子供はもらったばかりの銀貨を投げ返した。だがもう遅い。彼は島民の「掟」に反してしまったのだ。

「お尋ね者」保護に関する島民の義務について、『コロンバ』の「お尋ね者」を見るのも参考になる。そこでも「お尋ね者」が数人、盛んに登場し、マキに隠れ場所を求め、島民に守られる様子が描かれているからだ。「何かどじを踏んだ人間でも、ここなら十年くらいは憲兵や選抜兵に捜されずに太平楽で暮らすことができませ(七二二)<sup>(10)</sup>と書かれているのは『マテオ・ファルコーネ』の冒頭とほぼ一致する。「お尋ね者」たちはマキに逃げ込みさえすればとりあえず安全……なのだ。『コロンバ』では「お尋ね者たち」が周辺の住人にどのような庇護されているかが語られている。「お尋ね者」が必要とするパンと火薬、これらを近隣の住人たちが差し入れる。

ただし、『コロンバ』には、「お尋ね者」の存在を否定する登場人物が配されている。先刻紹介したオルソ青年で、彼はつぎのように発言する。

「ほどこし物をするのもいいがね、もうすこしりっぱな使い道がありそうなのだ。なぜ浮浪人なんか  
に火薬をとどけてやるのだ？ 悪事を働くために使うにきまつているじゃないか？ いったい山へ逃げ込  
む者にたいしてこの土地の人間がだれもかれもあまやかす気持ちをもっているようだが、このなげかわし  
い慈善の習慣がなかったなら、山へ逃げ込む者なんて、とつくにコルシカから姿を消していたにちがいな  
いのだ」（八五）。

彼らは単なる「浮浪人」だ、とオルソは言う。なぜそんな輩を庇護するのか、こうした庇護は「甘やかし」  
だ、住民が彼らを助けるのは「なげかわしい」慈善だ、こんな連中は「コルシカから姿を消して」ほしい、と  
までオルソは考えている。『マテオ・ファルコーネ』の父マテオが絶対的価値とする「お尋ね者」保護の精神  
は、オルソの観点からすると、有害以外の何ものでもない。島民のこうした別の意見も入れて総合的に判断す  
ると、マテオの信念が島の絶対的な掟ではないことが見えてくる。

ここまでは父親が掲げるコルシカの義務が絶対的なものではない可能性、また息子フォルチュナトの幼さとい  
う点に注目したが、十歳の児童が父が絶対視する島の義理人情の機微を理解しなかったからといって、「裏  
切り者」の罪を着せられてよいのか、という基本的な疑問がまだ残されている。

この少年に「裏切り」の責任を取らせることができないとすれば、彼の死はどうなるのか。現に息子は殺されるが、それはなぜなのか。罪は誰にあると言うのか。

疑問はもう一つ。間違った罰であれ、正しい罰であれ、子供を殺す父親の心境がなぜ語られないのか。息子を殺すには、それなりの余程の理由があるに違いない。それなのになぜマテオは自らの口から説明の言葉を発しないのか。これだけの「事件」を前に、本来ならば作家の手法はむしろ逆であるだろう。やむなく子供を殺すに至る、義理と人情の狭間に置かれた親の苦しい胸のうちを、作者は十二分に活用できるのだし、読者もそこを知りたい。彼の葛藤から感動的な人間ドラマが期待できるはずだ。

だが、奇妙なことに、すでに述べたように、マテオは迷うことも悩むこともしない。ただし急いで付言する、作者はマテオへの非難は一切発していない。子供を殺した残忍な父だが、その反面、彼は同胞愛に燃える男でもある。マテオは決然と息子に殺す。だが急いで付言しなければならないが、メリメはマテオを弁護もしていない。

わが子が無慈悲にも殺したマテオであったが、その彼を狂気の塊、鬼のような父親と決めつけないための、もう一つ別の視点―これについては次章以降で考察する―を加えることによって、メリメは父マテオを読者の全面的な拒否と憎悪の目からひとまず守ったかに見える。作者のこの手法により、『マテオ・ファルコーネ』は新聞紙上に読むセンセーショナルな「子殺し」三面記事と一線を画する文学作品となった。恐ろしくも重厚な「子殺し」物語として。

基本的な疑問はこうだ。こんな殺害を「迷うことなく」「果敢に」やってのける父親が狂人でも鬼でもない

とすれば、いったい彼は何者なのか。

マテオと妻のジュゼッパは、問題の日、息子に留守番をさせて羊の見回りに朝から家を空けていた。夫婦が仕事を終えて帰つてくると驚いたことに家に捜査隊員が数人いる。即座に警戒心を発動して銃を構えたマテオを安心させようと、捜査隊長の曹長が前に進み出て事の次第を説明した。

「ちよつと通り道だから、お前さんと姉さんのベツパに挨拶をしようと思つたのさ。今日はひどく駆けずり回つたが、まあ愚痴を言うどころじゃないのさ。大した獲物があつたんだよ。たつた今、ジャネツト・サンピエロを押さえたところさ」(三一五—六)。

留守中に我が家で「お尋ね者」サンピエロが逮捕されたというのだから、夫婦は驚いた。妻のジュゼッパが間髪を入れず「まあ、ありがたい！ あいつは先週私どもの乳山羊を盗んだのですよ」(三一六)と喜ぶと、マテオのほうは、「かわいそうに！ やつは腹が減つていたんだ」(三一六)と反応した。二人は同じ報告をまったく正反対に受け止めたのだ。逮捕の知らせに妻は胸をなでおろし、夫は深く同情した。コルシカ人が揃つて「お尋ね者」の保護を当然としていなかったのは、すでに『コロンバ』との対比で見たとおりだ。

この場合、夫婦の間でコルシカの仲間意識にずれがある。「お尋ね者」の保護について同じ一家のなかで意見が真つ向から対立している。息子がとつた行動について、したがって父母はまったく異なる判断を下すことになるだろう。

お宅の息子さんが「いてくれなけりや、とても見つからぬところだったのさ」(三一六)と捜査隊長はフォルチュナトが逮捕に協力したことに謝辞を述べた。ついては「何か立派な褒美」を少年に与えて「検事側への報告」書にその名前を書いておく、と付け加えた。これを受けて父マテオは低い声で、「情けないことをしやがった！」(三一六)と唸った。一方にとって褒美に値する手柄が、他方にとってははならない恥ずべき行動なのだった。

帰宅したマテオに声をかけるとき、捜査隊長は、「おーい、兄貴！ どうだい、達者かね？ おれだよ、従弟のガンバだよ」(三二五)と叫んでいる。この隊長がフォルコーネ家の親類だということが、ここから分かる。職務とはいえ、マテオの親戚であるこの人、「お尋ね者」を保護するどころか、逮捕に奔走している。<sup>(11)</sup>

マテオが信じる「島のエトス」が、一方で、同じ島民の親戚の男によって突き崩されつつあった。「お尋ね者」を迷惑と考えている妻、無法者検挙に邁進する親戚。マテオを取り囲むこうした人々の存在は、作品におけるマテオの信念の相対化に繋がっていく。

こんな場面も置かれている。マテオが銃を構えて自宅に向かって歩いてくるのを見た隊長は、つぎのようにつぶやくのだ。

「もしひよつとマテオがジャネット（お尋ね者）の血統きだったり、それとも友達か何かで、ジャネットの味方をする気になった日には、やつ（マテオ）のもっている二挺の鉄砲の弾は……こっちの連中の二人へ見舞って来る」(三二五、括弧内は筆者の加筆)。

隊長がここで怖れているのは、逮捕したジャンネット・サンピエロが万一マテオの血統きか友達かであった場合、逆に銃は自分たちに向けられるだろう、ということだ。マテオによれば、コルシカ人は誰であれ（とくに事情あつてマキに身を隠した「お尋ね者」であればなおさら）互いに庇いあうはずなのだが、同じコルシカ人ながら隊長の見解は明らかに別のようだ。彼によれば庇うべき相手は限定的に「血統きか友達」である。これはコルシカに限らず一般的な心情として理解できる範囲の仲間意識と言えるから、マテオと隊長の間には仲間意識そのものについて、埋めがたい溝がある。マテオのほうは、「血統きでも友達」でもない、いわば赤の他人への義理から、わが息子を殺すことになるのだから。

さて、この捜査隊長、フォルチュナトに「お尋ね者」の居場所を言わせるにあたつて、先に見た通り、銀時計を見せてこの子を釣っている。検挙側に立ち、職務に励む隊長には、マテオが掲げる島の義理人情はもはや通用しない。だが本来なら、大人の島民として彼は、親戚の幼い子に島の人情を論してもいい立場にあるのではないか。

この銀時計の件は、先刻、「お尋ね者」が匿ってもらうために使った五フラン銀貨の件の裏返しである。息子は銀貨と引き換えに「お尋ね者」の保護を引き受け、今度は銀時計と引き換えに「お尋ね者」の保護を解いたのだ。二度にわたつて金銭や物質に動かされる子供を描けば、年齢を理由に擁護したくなる気持ちが少々揺らぎそうだが、メリメとしてもフォルチュナトの完璧な潔白を主張するつもりはないように思われる。

父にとつて、息子が銀時計を受け取ったことは島の仲間を「売った」に等しいことだった。羊の見回りから

夫婦が帰宅すると、息子のシャツの端から銀時計の鎖がのぞいている。母がそれに気付いて問い詰めると、息子は「曹長の伯父さん」からもらったと告げた。傍らでそれを見ていた父は、やおら時計をつかんで「力任せに石にたたきつけ、みじんに砕いて」（三二七）しまう。息子が「仲間」より「利害」をとったと思ったのだ。怒りにまかせて銀時計を石に叩きつけて粉砕したマテオは、今度は憤りの矛先を妻に向けて、「おい、この子はおれの子か？」（三二七）と問う。一見、唐突なこの発言、妻への不貞疑惑と読む向きもあるようだが、そこまで深読みしないまでも、要するに物欲に負けるような子が自分の分身か、と言いたかったのであろう。自分の血を分けた子なら、こんな不義理をするはずがない……十歳にもなれば親の思いを汲んでしかるべしだと、彼は考えたのだ。そう言えば裏切られたと知って「お尋ね者」が吐き捨てた言葉も、「これがマテオの（息子か）……」だった。

すでに指摘したように、捜査隊長とマテオは従弟同士に設定してある。フォルチュナトが隊長とは顔見知り、彼のことを「曹長の伯父さん」と呼ぶ間柄だというのは見逃せない伏線である。なぜなら十歳そこの子供と親戚の「おじさん」という設定のもとでは、「おじさん」が強く求めれば、そして「おじさん」が銀時計を執拗にちらつかせば、子供に何か思うところがあっても「おじさん」の言うように行動してしまう……と考えてもおかしくないからだ。メリメはこの点でも少年擁護の余地を作っている。

一歩も譲れない道義的規範を貫こうとしている父、まったく対立する立場で（職務とはいえ）義理人情はどこへやら男の隠れ場所を教えろと迫る親戚の「おじさん」。価値観がバラバラになったコルシカ社会を代表する二人の大人に、フォルチュナトは現に囲まれている。それが「裏切り」とすれば、彼の「裏切り」は、島の

エトスが統一を失った状態のもとで起きたのだ。

## 暴力と供儀

作品は親戚の大人同士の間ですら島民の義務について、合意がもうなくなっていることを告げている。加えて、マテオが「掟」とする島民同士の忠誠心は、言語化・文字化を志向しない暗黙の了解から成り立つ種類のものだ。大人たちの分裂を見ると、マテオの信念そのものもすでに実際に空疎化している可能性がある。共同体におけるこの手の暗黙の約束事はメンバーが揃って死守しない限り、消滅する危険を孕むものだ。これは姿の见えない絆なのだ。

ここまで理解したうえで、現代の読者なら、つぎのように問いたくもなる。金科玉条の、それほどまでに大事な「掟」であれば、そしてそれを我が子に継承してほしいのならば、幼いころからその大切さをなぜわが子に十分に納得させ言い含めなかったのか、父親としての教育上の責任はどうなっているのか、と。だがマテオは言っただろう。「これは暗黙の約束事だ、言葉で教えて分らせる種類のものではない、それに息子はもう十歳だ」と。

「親の背中を見て学べ」に見られる種類の家庭教育、言語を敢えて介さないで培われる親子関係、腹芸による意思疎通などなど、国は違っても、わが国にも一脈通じる精神風土があった、もしくはある。いわゆる以心伝心を旨とするこの種のコミュニケーションにおいては、伝達内容を必ずしも紙という媒体に整然と書き留め

たりせず、また言葉で理詰めに説明したりということもしなかった。子供は親が黙っていてもその考えを汲みとり継承するべきであって、教えられなくても自ら身体（「背中」）で感知し体得するものだ」と。

当作品の息子は、ところが父の「背中」から何も学んでいない。逆に父のほうは息子が島の「掟」をもうとつくに「背中から学んでいる」はずと思い込んでいる。そこで息子の振舞いに愕然となる。

では「裏切られた」「お尋ね者」のほうはどうなったか。乾草の山に隠れているところを捜査隊に発見され、ただちに捕まり、担架に乗せられた。彼はマテオに呪詛の言葉を吐いて連行されて行った。この場面を本文はつぎのように描いている。隊長と一緒に近づいてきたマテオを見て、「お尋ね者」は「気味の悪い微笑を浮かべ」（三二六）、それから家の戸口のほうを振り向き、「敷居の上に唾を吐きかけながら叫んだ。裏切り者の家！」（三二六）と。

この言葉はマテオにズシリとこたえた。

裏切り者という言葉をもって、あえて（マテオ）ファルコーネを呼びうるものは、ただ死を決した男ばかりである。短刀の一閃は、すなわち二度とこれをひらめかす必要のない見事な一突きは、即座にこの侮辱に報いたであろう。しかるにマテオは喪心した男のように、額に手を当てたばかりで何もしなかった（三二六、括弧内は筆者が加筆）。

共同体への忠誠を暗黙の誓いとしたマテオであるから、自らの不義理を咎められるようなことでもあれば、

その侮辱に一突きで報いただろう、というのだ。名誉を重んじる者にとってもつとも不名誉な言葉を吐かれたマテオ。彼は「額に手を当てたばかりで何もなかった」<sup>13)</sup>。

マテオは「裏切り者の家」と言われた恥辱を息子の血で晴らすことになる。一家の「罪」を血によって「償う」のだ。本作品にある供犠の要素が、彼の覚悟と沈黙によって、濃厚になっていく。

さてここで、島に残るいくつかの類似のエピソードについて少し触れておく。F・O・レヌッチオはこれらの伝承テーマを一括りにして「罰せられた裏切り」と呼んで、つぎのように「裏切り」の状況説明をしている。<sup>14)</sup>

古来人類の社会を汚していた憎むべき裏切りは、この国には前には殆どなかった。われわれの祖先は、裏切りをひどく嫌い、汚辱の焼印を押された。当人だけではなく、その親族、子孫にいたるまで（多分これは不当であるが）そうされるのである。今日では、私にはなぜだかわからないが、コルシカは裏切り者で満ちている。至るところ密告、詭訴だらけである。しかも屢々偽りで、下劣で憎むべきものだ。ここにわが古い伝統の穢らわしい腐敗の徴候を見るべきか。

ここに見るコルシカの「腐敗」状況は、『マテオ・ファルコーネ』におけるコルシカ魂の空疎化に対応すると言ってよいだろう。レヌッチオが指摘する「腐敗」の内容とは「裏切り」や密告や詭訴であり、『マテオ・ファルコーネ』でコルシカ人同士の結束が崩壊しつつあるのと同小異だ。島民間相互の信頼関係が危うくなったことをレヌッチオも嘆いており、愛国精神に基づく規範が健在だった時代を基準にして、それを「腐敗」

と呼んでいる。

メリメが当作品の執筆にあたり参照したと思われる一連の「裏切り」事件が実際に起こったのは、十八世紀の反乱期―レヌッチオから七十年ばかり遡る「四十年戦争」と呼ばれる動乱の時代であつた。<sup>(15)</sup> 長らくコルシカを支配したジェノヴァの圧政に加えて、フランスその他の強国の干渉や侵攻が絶えることなく繰り返され、コルシカが反抗に立ち上がった時代である。強国に翻弄され続けた結果、コルシカ人の間の利害が錯綜し、寝返りや密告や裏切りを生みだしたとされる。

『マテオ・ファルコーネ』が書かれるほぼ一世紀前、現実問題として島は強国間の取引に巻き込まれ、内部分裂の危機に晒されていた。単一の倫理規範や純粹な愛国精神を拠り所として内部結束を維持するには、島民はすでに引き裂かれた状態にいた。レヌッチオの「腐敗」意識も、『マテオ・ファルコーネ』における「裏切り」行為も、ともにコルシカが社会的危機状態にあったことを告げている。

コルシカ人が目覚めて一致団結しなければ、こうした危機を乗り越えられないという愛国的な思いもまた、こうした状況下では逆に高まる。コルシカ軍に加わるフランス人脱走兵、フランス軍に入るコルシカ人、そして「村と村の間、家と家の間、氏族間に、幾多の怨恨」（大岡一八七）が蓄積されていた。『マテオ・ファルコーネ』が書かれた直後の一八三一年から三七年の間に起きたコルシカの刀傷事件は九四件に達したという（大岡一八七）。フランス領になって半世紀を越えていたが、動乱時代の内部決裂という傷は癒えていなかったのだ。

近代フランスの一部に組み込まれたコルシカには、避けられない近代化の波が押し寄せていた。長引く混乱

のなかで相互扶助という仲間意識も変容していたにちがいないが、マテオは愛国的人物の一人として、コルシカの「あるべき姿」への回帰に解決を求めている。その「あるべき姿」とは、マキに象徴される島の自然に結びあわされて生きる島民が共有する原初的な統一であった。マキに隠れる男は、したがって、「聖域」に今も生き続ける原初のコルシカ性を守る者の具現化なのである。

共同体の起源に関するこうした前提が、しばしば個人または集団が創り上げた幻想である可能性を否定できない。だが愛国心が、起源における単一性や「まとまり」への回帰というかたちで現れ出ることが多いのもまた事実である。愛国的な父マテオの観点から見ると、息子フォルチュナトによる、マキの男への最終的な保護拒否は、マキが象徴する島の原初の統一、そして島民の「まとまり」を侵す行為以外の何ものでもなかった。島の「聖なる」一体感がすでに危機に晒されていると感じられていた状況下で、息子が「聖なる」掟の侵犯行為をした。こうした場合、古代供犠においては、危機を招いたすべての邪悪なものが侵犯者に凝集されていった。<sup>(16)</sup>

古代の供犠においては、共同体の危機を救うために「近親者一人を生け贄として殺した」とされる。<sup>(17)</sup> また供犠的伝統においては「罪責性の原則」が尊重されなかったという。フォルチュナトの未熟が徐々に明白になり、それでも彼が罪を背負わされて殺されるという筋道を歩む本作品には、こうした意味での供犠性が色濃く組み込まれているように思われる。

供犠的な視点から見ると作品には、集団的破壊を防御するための一発、島崩壊の元凶となり得る者への懲罰としての一発が認められる。わが身内の者―他ならぬ自分の後継者―が侵犯行為を犯したわけであるが、こ

した社会的危機にあつては、親子や夫婦の絆にもすでに破れ目があつた。

社会の危機で崩壊するのは「要するに……人間関係」であり、その典型例が「父と子」「妻と夫」の分断である。こうした状況下では、しばしば「有害と思える自分以外の人物」が非難の対象となる。その人物が集団の不幸の原因として、罪を背負わされ、ついには殺される。

こうした場合、迫害の対象となる者の典型例は「共同体の除け者」（奴隷や捕虜など）であつたが、犠牲者の分類に子供（「もつとも弱く無防備な者、ことに幼児」）が入っている。「大部分の原始社会においては、子供やまだ成人式を経過していない若者もまた、共同体に所属していないのである。彼らの権利も彼らの義務も、ほとんど現実的に存在しない<sup>(19)</sup>」からである。成人未満の十歳の子の死を扱う本作品に響くものがある。

供犠においては、ある人物を迫害し犠牲にする際、告発される者は通常、自己弁護できないまま有罪とされた。古代の宗教儀礼で嬰兒殺しが頻繁に行われたのは、弁護できない者の代表が赤子だからだ。時を経て、人間供犠が動物供犠へとシフトしていくのは、さらにいつそう弁護できない対象として動物が選ばれて行く過程を物語っている。

フォルチュナトに「身代わりの山羊」的な存在を読み取るならば、彼は共同体統一のために献げられた、幼いがゆえに「自己弁護できない」犠牲者である。重要なのは、犠牲のメカニズムにおいては、犠牲者が根柢なく「有罪」とされるということだ。当作品の父マテオが息子の置かれた諸事情（年齢など）を考慮することなく、即断で息子を「有罪」としていることから、フォルチュナトの死には供犠的な犠牲を読み取ることができる。

さらに『マテオ・ファルコーネ』では、凄惨なはずの子殺しの実行者マテオが、驚くべき堂々たる態度で息子を殺している。ここから立ち上がるのは、供犠を司る古代の祭司のイメージである。祭司は共同体浄化の責を果たすそうとする勇士でもあった。<sup>(20)</sup>

## 神話と身体

マテオが掲げるコルシカの理想像は人類一般がもつ原初のユートピア回帰の一形態であり、人間は長らくこうしたユートピアを希求してきた。例え幻想であつても、これへの回帰は起源（始原）をもちたい人間の止み難い欲求と結びついて長らく人間の夢を支えてきた。ユートピアへの希求止み難く、人間は架空でもよいからよりよい過去を想定したのだ。マテオの信念や理想を、批判よりも共感をもつて迎え入れる読者がいるのは、人間のこうした希求の反映である。

加えて彼の忠誠心や義理固さは、文化によって評価が異なるとはいえ、倫理に反するわけではない。ノスタルジックな傾向も併せ持つこうした理想を内部に秘めて、わが子への執着を黙って断ち切る、潔い男としてマテオが立ち現れる可能性は大に見込まれるところだ。マテオは反発を呼ぶよりも、ときに共感すら引き出すキャラクターに造型されている。

作者はそこへ「男らしさ」に通じる敏捷さを加え（一旦決めると、すぐに実行）、それを彼のすぐれた身体的能力とタイアップして呈示した。<sup>(21)</sup>

「射撃にかけての彼の腕はすぐれた射手の少なくないこの地方でも並はずれたものという定評だった」(三〇八)。これが作者によるマテオ紹介の第一文だ。「百二十歩も離れた所から、(野羊の)頭なり肩なり、思いのままのところをねらって一発で仕留めた」<sup>(22)</sup>し、また「夜でも彼は日中と変わらぬくらい達者に銃を使った」(三〇八)。

別のエピソードでは、妻ジュゼッパを得るために彼は「情事にかけても決闘にかけても同じくらい恐るべき敵手」だった競争相手を銃で「片づけた」(三〇八)という。妻を含むすべてを腕力(体力)によって獲得しコントロールする…。人間関係を力勝負で生きる、すべてを闘い取る男、それがマテオだ。

前科を背負ってマキに逃げ込んだ「お尋ね者」をマテオは保護しようとするが、思えば「お尋ね者」たちも同類項、腕力・武力で人生を闘い取る連中である。この場合、体力力の誇示は男性性の誇示と重なり、それはまた暴力肯定の上に成り立っていた。『マテオ・ファルコーネ』が「体を張って生きる」男を主人公としている限りにおいて、物語自体の暴力的解決は当然の帰結となる。

武力を仲介とする仲間意識は、武器の操縦能力即ち広義の身体能力を媒体として育成される。ただしこれは成人男性―大人の男たち―を会員とする集団の話であって、十歳のフォルチュナトは体力的に対象外だ。子供は身体的に半人前であるから、まだ「共同体の外」だ。

にもかかわらず当作品の父は、十歳の息子に成人男子に求められる「島の掟」の順守を当然とした。弁別能力ばかりか、息子には基礎身体力もまだないというのに…。大人の男の体力を備え、危険物である武器を扱える技能を習得する…そのときはじめてフォルチュナトは、父親の掲げる男集団の正式メンバーになるのが本来

なら筋だが。

マテオが守り抜こうとした人間の絆は、過酷な侵略の歴史を、マキや山に忍びながら生き抜いたコルシカの男が、近代以降、銃と一体となつて身体で培ったモラルであつた。島では銃は男にのみ保持が許された<sup>(23)</sup>。銃は男であり、命を守る武器であるが故に、命と同格となつた。日本の侍における刀、ヨーロッパ中世の騎士における剣、いずれも闘う者は武器を偏愛する。

文化を問わず、闘士にとって、武器は単なる道具ではない。それは身体の延長、身体そのものとなる。武器が崇拝の対象となり、聖なるもの、魔力・呪力をもつものとなつた例は数多く知られている。闘士マテオが息子を銃で殺す場面に漂う奇妙な「勇氣」、奇妙な高揚感。これらは武器への崇拝とそれへの絶対的献身からほとばしり出るものだ。

体力・腕力で結ばれる男同士の絆は、女性や「女々しい」者を排除して成立する。妻ジュゼッパが夫の価値をそもそも共有していないわけである。瞬時の、覚悟を決めた殺害によつてマテオが誇示した勇氣、感傷性や迷いを一切カットしたドライで大胆極まる行為としての銃殺。「男の美学」を仮面に、なかば魔術的・呪術的な殺害の儀式が実行されたのだ。

武器崇拝という文脈で見ると、銃の名人マテオが銃操縦技能の華麗な誇示という危険な誘惑の中に生きていることが理解できる。この誘惑は暴力自体がもつ誘惑と一体である。こうして見ると『マテオ・ファルコーネ』の「見事な銃殺」は、武士の「見事な切腹」に似た様相を醸し出し、一種の死の美学に通じていく。マテオは他殺、切腹は自殺、と違いはあるが、いずれの場合にも完全な自己コントロールのもとで遂行される、少

なくともそのように見えるべく実行される。この種の自己コントロールは一種のパフォーマンスであり、畢竟、演出を伴うのである。

マテオの兇暴性と暴力が一旦、至高の銃技（身体能力）の次元で語られると、殺害者に「勇士」の色彩が施される。驚愕の殺人を心に決めて実際にその現場に息子を連行しているにもかかわらず、激情を抑制する冷静な姿。「山猫のような目」（三一七）の夫は、銃を肩に担いでマキへの山道に飛び出し、息子に大声で「ついで来い」と叫んだ。心が定まった、腹の据わった「不言実行」の男を秘かに賞賛する風土があることはわれわれも知るところだ。

妻のほうはいえ、これから起きる惨事を予測し不安に震えあがっている。「これはお前さんの子です！」と夫の後ろから追いかけて彼の腕をつかみながら哀れにも叫んだ。母は息子に接吻し「泣きながら小屋へ駆け込んだ」（三一七）。マテオの小宇宙は男の世界、力の世界、銃の世界であり、女は「小屋に駆け込む」しかすべがない。

「おとつつあん！ 後生だよう！ かんべんしておくれよう！ もうしないよう！ カポラルの伯父さんに一生懸命頼んでジャネット（お尋ね者）を許してもらおうからよう！」（三一八）が息子が発した最後の切ない哀願だ。子供の脆弱さ（男気はまだ芽生えない）、「弁明できない」哀れさが伝わってくる。次の瞬間、子供は「ばったり倒れてこたされた」（三一八）。

古代の供儀的な意味における英雄性に似たかたちで、マテオの身体技（銃技）が披歴されたことを見てきた。銃の名手は神器に等しいその銃を使って子供を殺したのだ。銃殺場面では、今まさに身体技を使って渾身のパ

ーフォーマンズをなさんとする冷静な闘士が発する厳肅な空氣が激しい殺氣を制している。

このように殺害場面は、古代に遡る供犠的・儀礼的な雰囲気の移植と、身体技の披露に関わる男の美学とによって、重層的な、緊迫した空氣の中で描かれるのだが、さらにそこへ宗教的な空氣が流れ込む。ヨーロッパ的伝統であるキリスト教の伝統である。

旧約聖書『創世記』における父アブラハムによる幼い息子イサク献呈の伝承、またアブラハムに関わるこのエピソードを「予型」とする、全能の「父なる」神による「ひとり子」イエスの生け贄の死、がその伝統である。

聖書ではアブラハムが神の命令で息子を「犠牲」に捧げるべく丘へと連れて行き、剣を振り上げる。当作品の父マテオは、幼い息子フォルチュナトをマキの裾野に連れて行き、銃を構える。聖書では剣を下ろそうとしたその瞬間、天から声がして父子は救われるが、メリメ作品では天からの声はなく息子殺害は完遂される。二つのアナロジカルな状況からして、『マテオ・ファルコーネ』の（当時の）読者（多くがキリスト教文化圏に属したと推定してよいだろう）がマテオに、「信仰の父」とされるアブラハムの敬虔な姿を重ねないではおかなかったと考えられる。

アブラハムとイサクの親子はヨーロッパ文化圏でもっとも人気のある聖書中の親子エピソードの主人公であった。数多の教会でレリーフとして、またステンドグラスとして、ヴィジュアルにヨーロッパ庶民の心に千年以上にわたって「子殺し」未遂のこのエピソードが文字通り刻み込まれてきた。中世宗教劇では数世紀にわたって村や町で、死の一撃を逃れようと父に跪いて哀願する息子イサクの可憐な姿が舞台にのびた。

『マテオ・ファルコーネ』の親子の裏に、聖なる「父と子」の物語が貼りついている。旧約聖書のアブラハム・エピソードが代表する、息子の「犠牲」は、新約聖書においてイエスの「犠牲」となっており<sup>24</sup>、そこでは「父なる」神の究極の愛の表現として息子が死ぬ。当作品でマテオが無言のうちに発散する威厳は、聖書が伝承するこの霊的な遺産を讀者が共有することで増幅される。

イエスの十字架上の死、それは「神の子」であるイエス自身の自己犠牲であるが、同時に「父」なる神が人類のために「子」であるイエスを生け贄として差し出したものでもある。この視点で見ると、イエスの死には「子殺し」のヴァリエーションが認められる。当作品の「子殺し」の枠組みとしてヨーロッパ文化のこの長い伝統をメリメは意識していたであろう。

『マテオ・ファルコーネ』のキリスト教的な宗教性は、父マテオが発砲前に息子に祈りを捧げさせる場面に具体的に示される。敬虔なキリスト教徒として死んでいく息子の姿が刻印される場面である。フォルチュナト銃殺の場も、聖書でイサクが父に連れて行かれる場所をなぞるものになっている。子に向かって剣を振り上げるアブラハムと息子に向かって銃を向けるマテオとが、結果として二重写しになる。わが子を犠牲として献げるといふ大いなる神の愛もまた、アナロジーとしてマテオの背後に、あたかも守護霊のように佇む。

これまで述べてきたことをつぎのようにまとめることができる。古代の「異教的」供犠伝統とその後展開したキリスト教の贖罪伝統という二つの神話的・宗教的な伝統の上に立つ『マテオ・ファルコーネ』は、コルシカのローカル性を古代の神話レベルにおける犠牲の問題として再生したということ、さらにその上にヨーロッパ的なキリスト教の贖罪原理を重ねて物語に宗教性を添加したということである。

父に殺された一人息子を作者が「幸いなる子」と名付けたことには、これまで述べてきた諸観点から見ても、軽い皮肉以上の意味を読み取ることができる。聖書の伝統に沿って、父マテオにアブラハムそして神の面影を追えば、息子フォルチュナトにイサクそしてさらに「ひとり子」イエスの面影を追うこととなり、そうならばフォルチュナトに被害者・犠牲者転じて「救済者」・「贖い主」の要素が入り混じる。

犠牲者すなわち「身代わりの山羊」は「呪われていると同時に祝福されている：二重の意味で聖なる存在<sup>(25)</sup>」であり、そこでは虐待と聖化が表裏一体となる神話的な世界が展開されている。「不幸にも」父に殺害される運命を担う子を「幸いなる」子と命名したメリメは、息子の名前のなかに、善悪二元論を超えた神話的な発想、価値観の混合を、嵌めこんだのではないだろうか。

またまったく別な観点からも、結果論として、フォルチュナトは「幸いなる子」であるかもしれない。継承するべき「祖国」は混乱の状態にある、いやすでにバラバラに分裂している。そんな中で次世代を継承することなく死んでいったのは、考えかた次第であろうが、彼にとって「幸い」だったと言えるかもしれないからだ。

## あとがき

わが国ではかつて鈴木三重吉が『マテオ・ファルコーネ』を高く評価し、児童文学としてその翻案を何度か試みた経緯がある。鈴木は物語の決着である殺害に困惑した模様で、何度かの改作の過程で殺害を省略したようであるが、それはもつともなことだ。何度書き直そうと、そもそもこの物語は子供向きではないし、親への

従順なり何なりを教える素材ではない。「親の威厳」を示すにしても、最後の殺害を入れてしまうと、無論、教訓どころか逆効果となるのは目に見えている。

『マテオ・ファルコーネ』では因果関係の確立がそもそも目指されていない。この物語から子供向きの教訓を引き出せないのは、この点からも必然である。子供向きに書き直すなら、せいぜい「勝手なふるまいをする」と怖い目にあうぞ」と警告する話になるしかないが、これでは作品は骨抜きになる。重要な登場人物が子供であるからといって、即児童文学ではない好例と言えよう。

もう一つの誤読の可能性は、この作品の兇暴性をコルシカの「野蛮」と結びつけるものだ。「コルシカ男の典型」例としてのマテオは、暴力をふるう「野蛮人」で、理性と合理的思考を併せもつ「文明人」の対極にある……とする解釈は今でも出て来そうだが、これはコルシカに対する当時の（また現在の）一般的偏見を、作品に投影した結果にすぎない。<sup>(27)</sup> メリメの時代そして今なおフランスにとってコルシカが例え「辺境の島」であった（ある）にしても、『マテオ・ファルコーネ』でメリメは、当時の偏狭なコルシカ理解を越え出て、歴史を縦断する神話的レベルに遡り、暴力の普遍的な問題を掘り下げる作品を書き上げたのだ。

パリを舞台にした「子殺し」事件を書くことも可能だったろうが、メリメはコルシカ人という他者性を敢えて使った。一つは彼得意の、そして当時流行したエキゾチズムへの便乗、もう一つは「文明」と合理性を建前とする自文化内での暴力物語には思わぬ制限がつきまとうことを予想してのことだろう。当時の一般的偏見を逆利用するかたちで、メリメはコルシカを舞台にしたと考えられる。<sup>(28)</sup>

マテオの暴力が神話レベルで語られているということ。この作品では神話の重層的な動員が、コルシカに対

する読者の偏見を利用した上で、自称「文明人」読者に暴力の普遍性を見せる働きをしている。さらに聖書的なアナロジーによって、マテオに崇高なオーラが張りついており、その奥には古代の供犠を司る祭司のイメージが埋め込まれている。これらはマテオに共感したいという、読者の隠れた衝動を吸い上げる格好の装置となる。

他方、「子殺し」が「文明圏」にはないのか、という問いに「ない」と断言できる「文明人」読者はヨーロッパにも日本にもいないはずだ。つい二カ月前の大阪では若い母が二人の子供を餓死させた。現在の日本が過去に比べて「子殺し」数に減少を見ているわけではないこと、いやむしろ増加の傾向にあること、そして二百年近く前のフランスにも、幼児虐待や「子殺し」があった。作者メリメはもちろん、マテオに同情心を抱く読者も、皆それを承知していた。

神話において流血は、刷新への期待を含んだのだが、そして確かに聖書におけるイエスの贖いの死は生の蘇りをもたらしたが、メリメの国では、大きな革命におけるそれも含んで、暴力が果たして刷新をもたらしたのか。フォルチュナトの死がマテオの理想を島に回復したとは言いい切れない。

古代の供犠、そしてそれを受け継いで展開したキリストの十字架上の死は、いずれも身体による贖い即ち流血を背後にもつ。人とりわけて「文明人」を自認する読者は、動物もしくは人間の流血が刷新への期待を担って執り行われた儀礼であった過去を遠くに置いて来た、もしくはそれを認めたくない。だがメリメは、あたかも無意識の世界から人類のこの恐ろしい過去を呼び返すかのように、コルシカの地にその儀礼を再現した。

作者は息子の幼さと脆弱を前面に押し出して、この子供に反射的に押しつけられた「裏切り者」のレッテル

に疑問を呈し、結果として、マテオの身体原則に基づく威厳、究極的には殺害の正当化、を疑問に付した。<sup>(31)</sup> マテオが漂わせる祭司的権威は密かに打ち碎かれ、強者が発散する表向きの自信に疑問が呈される。フォルチュナトに貼られた「裏切り者」のレッテルが一旦剥がれるなら、マテオが掲げる島の始原の調和そして彼の忠誠心も、ただの妄想に成り下がりがかねない。

「聖なる供犠」のベールを剥げば、物語の底には父による狂おしい子供の私物化、弱者を切り捨てる暴力としての「子殺し」が沈殿している。メリメは本作品で神話を正反対の二つの方向において作動させたのである。神話は、その物語性によって暴力を隠蔽する働きをし、同時に人間社会の深層にある暴力の普遍性を読者に開いて見せたのである。

## 注

- (1) プロスペル・メリメ、杉捷夫訳『マテオ・ファルコーネ』、『メリメ全集』第一巻 河出書房新社 一九七七年、解説五二二頁。本稿ではテキストとして Prosper Mérimé, *Mateo Falcone, Romans et Nouvelles*, Éditions Gallimard 1951 第一巻を用い、本文中の引用には杉の名訳を用いて頁番号を括弧内に付す。他に Prosper Mérimé, *Mateo Falcone, Colomba*, Librairie Larousse, Paris, 1938 も参照した。
- (2) 『コロンバ』については奥田宏子「メリメの文明論——『コロンバ』、近代化、伝統」『人文研究』一七〇号 二〇一〇年、三七—六二頁参照。
- (3) この時代にコロシカがフランス小説のテーマに選ばれたのは植民地主義の領土拡大政策（当作品発表の一年後にフランスはアルジェリアに進出した）と無関係ではないが、これに加えて同島がナポレオンを生み出した島であることも要因と考えられる。
- (4) コロシカ訪問後、『マテオ・ファルコーネ』に手を入れたが、細部（主人公の帽子の形状など）に関するものである。テキストは最終版による。

- (5) Fortunio フォルトゥナートの日本語表記は統一のため杉のフォルチュナトに従った。他の登場人物名も同様。
- (6) 「お尋ね者」は *proscrit* の邦訳。単なる「悪党」「罪人」でなく、いわゆる「アウトロー」、この時代には主として政治犯だった（大岡「コルシカの脱走兵」『大岡昇平全集』筑摩書房 一九九四年、第八卷 六二二頁。）メリメと同時代人の大デュマがロビン・フッドを主題とする物語を *Robin Hood, le proscrit* としているところから、いわゆる「義賊」にも同じ語が当てられている。
- (7) コルシカの歴史について、長谷川秀樹「コルシカの形成と変容」三九社 二〇〇二年、ジャニーヌ・レスヌッチ 長谷川秀樹・渥美史訳『コルシカ島』白水社 一九九九年 参照。
- (8) メリメが下敷きにした可能性があるいくつかの資料では息子は子供でなく十七、八から二十二歳までの若者である。類似的「裏切り事件」について『マテオ・ファルコーネ』に興味をもった大岡が右掲「コルシカの脱走兵」で言及している。
- (9) 大岡は「バリの子供のようになまなましくれた悪童」とフォルチュナトを描写し、十歳という年齢設定をメリメの考案としつつも、この子供を「悪賢さ」と「強欲」を併せ持った「裏切り者」と見ている。当作品の要を「子供の心性の中に住む悪」とする大岡の解釈は本稿の解釈と明らかに拮抗する。大岡「凍った炎」『全集』第八卷、六五三―六六一頁も参照。
- (10) 『「ロンバ」』のテキストは Prosper Mérimée, *Colomba, Romans et Nouvelles*, Éditions Gallimard 1951 第一巻、引用は杉捷夫訳『「ロンバ」』岩波書店 一九六七年を用い本文中で括弧内に頁番号を付す。
- (11) フランス軍がコルシカの現地人の中から補助憲兵を募集して島の治安維持に当たらせ始めたのは一八二二年、当作品発表の七年前である。メリメは発表当時のコルシカに時代を移しかえて島の政情を作品に反映させている。
- (12) 大岡はこの台詞はコルシカ人に似合わないとし、「姦通が慣習化しているバリ人」の台詞の意識的導入と見ている。大岡「凍った炎」右掲『全集』第八卷所収、六三五頁。
- (13) 名誉を重んじ面子にこだわるマテオには日本の任侠心に通じるものがある。川崎竹一が本作品に『コルシカの俠客』という題を付しているのは、この意味で興味深い。『コルシカの俠客』大学書林 一九四八年。なお日本の任侠精神については石川全次『アウトローの近代史』平凡社 二〇〇八年 参照。

- (14) メリメが参考にしたと思われる資料に関していくつかの調査研究がある。メリメの文体を比較検討した Antoine Naaman, *Mateo Falcone de Mérimée*, Nizet, 1967 に粉本の紹介がある他、大岡昇平も『コルシカ紀行』中央公論社 一九七二年で粉本に関する情報をまとめている。この引用は大岡一六五―一六頁。以下この章での同書からの引用は「大岡」として頁番号で括弧内に付す、
- (15) 物語の原型には古代に遡る伝説があるとされる。Alexandre Krappe, "Notes sur les sources de Mérimée," *RHLF* (1828), 256-60 は「原型」となった伝説を指摘しながらも、メリメは必ずしもこうした伝承を認識していなかっただろうとしている。本稿の解釈との関連ではメリメが伝承を文献として参考にしたかどうかよりも伝承の存在自体が物語の古層に流れる神話的水脈の指標となるという意味で重要と考える。
- (16) 当作品に異教的な儀礼の痕跡を読み取る研究に James F. Hamilton, "Pagan Ritual and Human Sacrifice in Mérimée's *Mateo Falcone*," *The French Review* vol LV (1981), 52-55 がある。著者はコルシカに伝わる焼き畑農業を「火」による豊穡回復と見て、それを古代の儀礼的な「血」による豊穡回復と結び付け、本作品の息子が流す「血」の意味を古代地中海世界の異教的豊穡儀式の文脈で解釈している。
- (17) ルネ・ジラルル 古田幸男訳『暴力と聖なるもの』法政大学出版局 一九八二年、四一頁。
- (18) ルネ・ジラルル、織田年和・富永茂樹訳『身代わりの山羊』法政大学出版局 一九八五年、二三頁。ジラルル説の基点には「集団暴力」とその「犠牲者」があるが、集団暴力がただ一人の人間もしくは神に「転移」するケースも含めて論じている。当作品の場合、一人の人間の背後に共同体の掟という集団性が想定されていることに留意する必要がある。ちなみにいくつかの粉本では裏切り者の「処刑」が父親一人でなく親族一同つまり集団でなされており、物語の原型に「集団暴力」があったことを示唆している。
- (19) ジラルル右掲『暴力と聖なる者』一九頁。
- (20) 子供を殺すマテオの奇怪な落着きと威厳について本稿はいくつかの側面から考察しているが、大岡はマテオの「冷静」「無感動」は作者メリメのサディズムの露呈と見ている、大岡「凍った炎」右掲『全集』第八巻、六六三頁 参照。
- (21) 右掲 Hamilton "Pagan Ritual" はマテオに限らずマキに住む人々を "man of action" と呼んでいる (五三頁)。
- (22) 「野羊」を例としてマテオの銃技が描写されているのは偶然ながら「身代わりの山羊」との関連で興味深い。なお本稿の解釈はジラルルの神話論を援用しているが、メリメとジラルル間に何らかの影響関係を想定するものではない。ともにフランス人ながら言うまでもなく両者の活動

した時代は大きく隔たっており（ジラールは一九二三年アヴィニョン生まれ）、文芸評論家・人類学者であるジラールが、いかなる意味であれ、メリメに言及しているのを筆者は知らない。本稿の意図は、当作品が内包する十九世紀初頭にしては例外的に鋭い神話に関するメリメの洞察力が後代のジラールによる人類的な基盤に立つ神話の体系化によって理論的に説明されていることを指摘することにとどまるものである。

- (23) コルシカが基本的に男社会であることを指摘した上で右掲 Hamilton “Pagan Ritual”（五四頁）は、本作品における子供の犠牲は「女、子供」が周縁的存在だったことと関係があると述べている。

- (24) キリスト教が古代イスラエルのユダヤ教を起源とすることから、古代供犠の「犠牲」とキリスト教における「犠牲」の連続性はつとに認識されているところである。本稿は作品解釈の上で、その連続性の意義に着目するが、二つの「犠牲」の明白かつ重要な分岐点については、論旨から外れるので、これを論じる場と敢えてしていない。なおジラールは神話における「犠牲者」の「聖化」について敵意が崇拜の念に変容することとを指摘している（『身代わりの山羊』、八二頁）。

- (25) 『身代わりの山羊』、九七頁。

- (26) 改作の経緯を研究した論文に、佐藤宗子「『マテオ・ファルコーネ』の改作——鈴木三重吉の『父』」「比較文学研究」東大比較文学会、第三八号（一九八〇年）、九八—一〇八頁、「赤い鳥」における二つの『マテオ・ファルコーネ』をめぐって『日本児童文学』第二九一号（一九七九年）、一一〇—一三〇頁、高木雅恵「鈴木三重吉におけるメリメ受容」*Comparatio* 第十一号（二〇〇七年）、二〇—二七頁がある。高木には、三島由紀夫がメリメに注目していたこと、武士の心構えを説いた『葉隠』を愛読した三島の「死」と「美」がメリメに通じること、メリメが曾祖母を通じて日本の武士道を知っていた可能性があること、などを指摘する論文「三島由紀夫における死あるいは美——模範としてのメリメ」*Comparatio* 第十二号（二〇〇八年）、四四—五四頁がある。

- (27) マテオの残虐性が民族としてのコルシカ人を特色づけるべくして描かれたわけではないことはカルメンの自由奔放が一義的に民族としてのジブシー（ロマ）を特色づける目的で描かれたものでないと同様である。『カルメン』については別稿で論じた。奥田宏子「メリメの文化論——『カルメン』、ヨーロッパ、アイデンティティ」『人文研究』一六九号 二〇〇九年、一—二四頁 参照。

- (28) コルシカの「辺境性」について右掲奥田「メリメの文明論」参照。

- (29) メリメ作品にしばしば見られる「視点の操作」を作者の「複雑な「重性」として論じた論文に Scott D. Carpenter, "Of False Napoleons, and Other Political Prostheses: Writing Oppositionally from the Second Empire," *Nineteenth-Century French Studies* vol. 25, 1997, 302-19 があ
- る。ここで述べている、読者の偏見を逆手に取る手法も、同様の「視点操作」の一部と見ることができる。なお、この手法はメリメ作品の一般的特徴であり、右掲拙稿「メリメの文明論」でも『コロンバ』における作者の「意図的な曖昧」として論じた。
- (30) ジラールの神話理解によると、迫害者の死によって共同体を毒しているあらゆる疑惑や緊張が取り除かれ、危機からの解放、分裂の解消が感じられ、「訓練をくぐりぬけることで活力を得た共同体に…宗教的な結合のうちに、まったく新しい秩序が生まれる…」『身代わりの山羊』、七〇頁。
- (31) Francesco Fiorentino, *I gendarmi e la macchia: l'esotismo nella narrativa di Merimee*, Liviana Editrice, Padova, 1978 はメリメが奥深くにもつマテオに対する共感について語っている。本稿は結論的にこの解釈と袂を分かたず、フィオレンティーノの解釈は本稿が注目するところのマテオの奇怪な「自信」を再確認させるものとなっている。